

老いとは、大変なものです。若い頃は軽々と駆けあがることができた階段も、ゆっくりとしかのぼれなくなりますし、細かい文字が見えにくくなったりします。

お釈迦さまも、晩年、付き人であるアーナンダ（阿難尊者）に語っています。「アーナンダよ、私は老いた。すでに八十才になったのだ。例えば、古い車の車輪が、革紐の助けによって、ようやく動くことができるが、思えば、私の体も、革紐の助けによって、ようやく動いているようなものだ。」

このように、お釈迦さまは、老いの難儀さを率直に語っています。

別なところでも「アーナンダよ、私は疲れた。横になりたい。」といて、アーナンダに寝る場所を設けさせたりもしています。

お釈迦さまのご自身の老いへの態度は、とても率直で自然なものだといえるでしょう。老いの大変さを、決して隠してはいないのです。老いを老いとして、自然に受けいれています。

しかし、老いの大変さに、押しつぶされているわけではありません。

先ほどのお釈迦さまの言葉は、布教の旅の途上で語られたものです。老いの難儀さを言葉にしながらも、教えを伝え、人々と語り合うことを、やめてはいないのです。

お釈迦さまの心は、人々や世界に向かって、常に開かれているのです。

「いと麗しき国王の車も、やがては朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし心ある人の徳は老いることがない。心ある人は互いに、真理を語り合う。」

まさに、このご自身の言葉のごとく、お釈迦さまは、老いを生きたに違いありません。

私たちは、老いを避けることはできません。そうであるならば、それを自然に受けいれ、「年を取るって大変だな」と、率直に大変さを訴えながらも、常に、人々や世界に向かって心を開いていく。そのような生き方を、お釈迦さまは私たちに示されているのではないかと思うのです。

どうか、老いの日々を、晩年のお釈迦さまのように、豊かにお過ごし頂ければと思います。